

説 教 エレミヤ書 32 章 31～34 節 ヨハネ福音書 21 章 9～14 節

「汝等の国籍は天にあり」  
2011・08・07 (説教11321389)

ドストエフスキーの文学作品が世界に及ぼした影響には測り知れぬものがありますが、何よりもそれは彼が人間をその極限において観つめている点にあります。ある人はそれを「ドストエフスキーは人間存在をその消失点（ヴァニティンク・ポイント）において見つめているのだ」と申しました。この「消失点」とは言い換えるなら「人間の絶対的な限界」のことです。全ての人間存在は“死すべきもの”であるということです。歴史的に見るならば死が私たちの存在を規定する唯一の絶対的な限界であると言えるのです。すなわち使徒パウロがローマ書で語る「死の縄目」こそが不確かな私たちの存在における唯一の確実性なのだということです。

これは言い換えるならば、人間は死において徹底的に孤独である。人間はその孤独に耐えられないのです。つい先日、自暴自棄になった父親がわが子を道連れに自殺するという事件がありました。こうしたことはキリスト教国では考えられないことです。子供は親の所有物ではありません。もし人間の死について“ドストエフスキー的省察”を少しでも持つなら道連れ自殺という行為そのものが全く無意味であることがわかるのではないのでしょうか。その意味では人類の歴史上現代ほど死に対する幻想が人間を支配している時代はないと言えるのです。

私たち人間が死において徹底的に孤独であること。これは言い換えるなら私たちの存在に対して最後まで責任を持てる他者はこの世界には存在しないということです。私たち人間とこの世界はそれほど「ヴァニティ」（虚無的）な存在なのです。この現実に対してドストエフスキーは2つのメッセージ（2つの道）を示します。第一に「悪霊」のキリーロフのようにみずからが神になり替わる人間神格化の道です。ここには全く希望はありません。しかし第二の道があります。キリーロフのように死を克服しようとして逆に死の虜になるほかない私たち。その私たちを限りなく愛し贖って下さる唯一の神がおられる。そのかたこそ主イエス・キリストである。このキリストにどう答えるか、それは信仰告白でしかないのです。つまり「罪と罰」のラスコーニコフのようにラザロと主の弟子たちの復活の福音を聴き、キリストを信じる者になることです。キリストに自分を委ねることです。ただここにのみ人間が人間たりうる唯一の「生命の道」があるのです。

そこで今朝の御言葉であるヨハネ伝 21 章 9 節以下を改めて拝読しますと、そこには実に驚くべきことが宣べ伝えられているのです。それは一言で申しますなら、主イエス・キリストみずから私たちのために“生命の食物”を既に備えていて下さっているという音信です。9 節をご覧になりますと「彼ら（弟子たち）が陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。イエス

は彼らに言われた、『今とった魚を少し持ってきなさい』。シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百五十三匹の大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた」と記されています。夜通し漁をして何ひとつ獲れずにいた弟子たちは疲れと飢えで憔悴しきっていました。戻ってゆく岸边は彼らにとって絶望の岸边でしかありえなかった。舟に乗って沖に出てゆくのは人生の姿です。しかし収穫は何ひとつなく絶望の岸边に帰らねばならないのです。それはそのまま「死の縄目」に取り纏われた私たち人間の姿です。沖に出た舟は岸に戻らねばならない。しかし戻ってゆく岸が絶望の岸でしかないなら、そもそも沖に出ること自体に何の意味があるのか。人間存在は偶然性の産物に過ぎず、確かなものは何ひとつない。その人生の行く末が死でしかないのなら、そこにどんな意味と価値があると言うのか。それこそ弟子たちの疲れであり、私たちの人生への根本的な問いなのです。

今朝の御言葉は、まさにその私たちの根源的な虚無の中ではっきりと私たちに語りかけています。たとえ私たちの人生に何ひとつ収穫がなくても、なおそのあるがままに私たちの人生全体をかき抱くように限りなく愛し、待っていて下さる「生命の主」がその岸边に立っていて下さるのです。そのときその岸边はもはや絶望の岸ではなく生命と希望の御国として私たちの眼前に現れるのです。それこそ教会生活(礼拝者の生活)に現わされた祝福です。私たちは一週間の初めのこの日曜日を「主の日」として礼拝を献げ世の旅路に遣わされてゆきます。喩えて言うならそれは港から船が出てゆくようなものです。沖に出た私たちはそのまま漂流するものではありません。来るべき主日のたびごとに帰るべき祝福と生命の港に帰ってゆくのです。私たちには帰るべき故郷があるのです。そしてそこで新たに御言葉による生命の喜びと幸いにあずかり、新たな一週間の航海へと出てゆく。ですから主日の礼拝にあずからない生活、キリストの御身体なる教会に連ならない生活は喩えるなら、港を持たない人生・漂流するだけの人生と同じなのです。

船をよく見ますと船尾にかならず母港の名前が記されています。客船クイーン・エリザベスなら“サウザンプトン”と、飛鳥IIなら“横浜”と母港の名が記されています。私たちも同じです。このことを使徒パウロはペリピ書 3 章 20 節に「しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる」と語っています。ここに「来られるのを」とあるのは、ラテン語ではアドヴェントゥムです。待降節(アドヴェント)の語源になった言葉です。もしわが子が危険な目に遭ったら、親はどんな危険を冒してでもわが子を守り助けるために駆けつけるでしょう。同じように、罪によって神から離れ死の縄目に巻きつかれている私たちのために主イエス・キリストはご自身を無にして世に来て下さったかたなのです。神は私たちを限りなく愛し、その救いのために独子を惜しまずお与えになったほどこの世を愛して下さいました。ヨハネ伝 3 章 16 節のとおりです「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さいました。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の生命を得るためである」。

そして今朝の御言葉にはそれと共に、限りない救いのおとずれが告げられているのです。それは今朝の 11 節以下に、主イエスの御言葉のとおり舟の右側に網を降ろしたところ「百五十三匹の大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた」とあることです。この「百五十三匹」という数字は主イエスの時代の古代イスラエルで知られていた魚の全種類でした。つまりこの数字は主イエスの十字架による贖いによって全世界の民が神のもとに招かれている救いの約束を現わすのです。しかもそれはみな「大きな魚」でした。漁師にとって「大きな魚」ほど価値あるものはありません。鯛でも 20 センチの鯛と 50 センチの鯛では十倍ぐらいの価値の差があるのです。それと同じように私たちは主なる神の御前にかげがえのない価値ある存在とされています。御子イエス・キリストをさえ惜しまず世に賜った神の愛によって、私たちはあるがままに限りない価値ある存在とならせて戴いているのです。神の愛はその愛によって私たちに無限の価値を与える愛です。この神の愛を聖書の言葉では“アガペー”と呼ぶのです。

神は御子イエス・キリストによって私たち全ての者に、この世界の万物と歴史の全体に限りない愛(アガペー)を現わされました。私たちがまだ罪人であったその時にさえ神は御子の十字架によって私たちの罪を贖って下さったほど私たちを愛されたのです。私たちに誇るに足る何か、価値があるから、主は私たちを愛されたわけではありません。価値を問われたら神の御前に黙すほかない私たちです。虚無に取り囲まれた私たちです。しかしその私たちを主イエスは限りなく愛され、ご自身を献げて虚無から贖い出して下さり、御国の民として下さいました。その愛によっていま私たちに無限の価値が与えられているのです。人間が人間たりうる唯一の救いの道がそこにあります。キリストの内にこそ私たちの変わらぬ救いがあり、生命があり、慰めがあり、幸いがあるのです。そのキリストの恵みが私たちを満たして下さい。そのとき私たちの国籍は天にあるのです。

主イエス・キリストはまことにアドヴェントの主(来たりたもう救い主)であられます。私たちのため、私たちの救いのために来たりたもう主は、すでに死の虚無をも私たちのために打ち砕き、全ての者を永遠の生命と祝福の岸へと招き、そこで御言葉の養いを与えて下さる唯一の主なのです。このかたの極みなき愛によって私たちはすでに今ここで天に国籍を持つ者とされているのです。その確かなしるしこそこの教会であり、これからあずかる聖餐の恵みです。この教会に連なる私たちは主の復活の生命に支えられ満たされているのです。永遠に。